在宅への取り組み実績も基盤に

地域の〝かかりつけ〟の役割担う

アイセイ薬局国母店

全国に316店舗（2016年12月2日時点）の調剤薬局ネットワークを展開する、アイセイ薬局（本社東京千代田区）。現在、調剤薬局業界が医薬品供給拠点という〝モノ中心〟のイメージから、より親切丁寧に患者一人ひとりをケアする〝人中心〟のサービスへと転換しようとしている中で、これまでも医師との連携による地域包括ケアへの参画や、地域の健康情報拠点としての役割を重視した取り組みを進めてきた。「健康サポート薬局」についても、地域密着にこだわる従来の基本路線に沿った患者対応の一つとして、今年からグループで順次取り組みを進めていくという。

かかりつけ薬剤師登録　日頃からの信頼を実感

「健康サポート薬局」について、現在は届出を行っての受理待ちとなるのが、アイセイ薬局国母店（甲府市）。同薬局で最も特徴的なのが「在宅医療」への取り組みで、山梨県内のアイセイ薬局10店舗のみならず、「全国の300を超えるアイセイグループの中でも、積極的な対応はトップクラス」（本社コーポレート・コミュニケーション部）とする。

アイセイ薬局国母店は2011年の開局で、JR身延線の国母駅から徒歩7分の場所にある。処方箋枚数は月1200～1300枚で、そのうち在宅の処方箋が月70枚ほど。国母店のスタッフ（薬剤師は3人体制）を率いる薬剤師の望月一司店長は、薬学部を卒業後、大学の研究室に2年間在籍し、地元の調剤薬局に勤務。その後、すみれ薬局（現在のアイセイ薬局）に入社した。在宅医療への取り組みは、すみれ薬局の時から既に行っており、近隣医師との連携だけでなく、看護や介護等と関係者とも積極的に連携を心がけており、いくつもの研究会を新任し講師も務めている。

アイセイ薬局国母店（甲府市）

望月氏はこうしたコメディカル向けの講師だけでなく、医師を対象にした講師もしており、薬学的側面からの〝かかりつけ医〟のための講座等も今年度は担当している。また学会活動にも参加し、日本プライマリ・ケア連合学会、日本腎臓病薬物療法学会にも参加し、発表も行っている。

アイセイ薬局では現在、本社内の「健康サポート薬局企画推進部」が中心となり、取材時点（12月上旬）では届出受理の薬局はないものの、グループとして同制度への対応を進めているという。

国母店では行政から示された「健康サポート薬局」の主な基準要件（関係機関との連携体制の構築、人員配置・運営、医薬品等の取り扱い・設備）については、在宅や輪番制の電話による24時間対応など、これまで多くが実現できていたため、特に急がれる準備はなかったという。所定の研修を修了した薬剤師の常駐に関しても、今年から1人が要件を満たしたことで、スムーズな業務が図れる見込みだ。

望月店長（左から2人目）ら薬局スタッフ

国母店は〝かかりつけ薬剤師〟の登録率も、アイセイグループでトップクラスの実績という。同薬局は甲府市内で、山梨医大、県立中央病院、甲府市立病院を結んだ三角形の中間ぐらいに位置しており、すぐ隣には胃腸科のクリニックがあるが、前記の基幹病院から処方箋を持参する広域患者も含め、形の上では両前薬局であるが、ほとんど〝面〟での対応といっていい。

また、高齢者施設も含めて在宅対応への取り組みは人々にも認識されており、望月氏は「かかりつけ薬剤師・薬局ということに関しては、これまでも地域のかかりつけ薬局を目指しており、比較的スムーズな流れで同意をいただいていることからも、患者さんに選ばれているのかなと感じます」とのこと。

24時間対応も以前より行っていたもので、電話当番を決めて、薬局の時間外でも何かの際には医師や看護師から連絡が入る仕組みとしている。

外来の患者からの電話では、夜になってから不安になって聞いてくることも少なくない。安心して対応してくれる薬局、頼れる薬局という認識が、地域の患者さんに浸透している様子がうかがえる。「（届出が受理され）健康サポート薬局となっても、それほど処方箋枚数とかの変化はないでしょうが、とにかくアピールはしていきたい。それは、厚労省が求める一つの医療費削減のモデル、医師不足の問題に派生して予防医学や高度医療での薬物療法において、薬剤師の利用により負担減になることにマッチしていると考えています。さらに言えば、参画することで国民にアピールできることを含め、健康サポート薬局は業界全体にとっても、アイセイ薬局にとっても中長期的に利するものであると捉えています。少し人的な余裕ができれば、今まで以上に地域の方々に向けた活動や他の地域の新たな医師との連携にも取り組みたい」（望月氏）

病状改善や健康増進に役立つ情報を分かりやすく解説した季刊フリーペーパー（アイセイ薬局が編集発行）など、情報発信に力を入れる

今後も医師との連携強化図る

望月店長が目指す薬局の姿は、「患者との信頼関係を構築し、薬剤師として地域住民に貢献する。そして社会から評価され、生き残る薬局」である。日頃から近隣の医師と連携した薬局業務、在宅業務を行っているが、「例えば培養してもらって菌を同定した後に、こちらは抗生剤の選択とか情報提供をさせてもらったり、検査数値に基づいた処方提案も全ての症例に対して行っている。私の薬剤師になった頃からの目標として、共同薬物治療（CDTM）があり、現在は薬局版として個人的にはほぼできています（往診同行からその場での処方設計・提案、電話での対応からの提案、外来での疑義と同時での情報提供等）。ただ厳密に言えば、本来はプロトコルに基づき管理されたやり方が理想的なあり方です」という。

具体的には「個々の能力に依存せず、幅広く様々な薬剤師が携われるよう、開業医との間でのプロトコルの作成も視野に入れての活動が今後は必要」との考えで、「薬学的なアセスメントとアナライズを含め、考察してプランニングができる臨床薬剤師を育て、多くのアイセイ薬局の薬剤師ができるように、実践的な現場での教育に力を入れることができたら、業界にとっても当社にとっても非常に力がつき、多くの現場で活躍が見込めると思います。また、薬局がかなり臨床から遠い存在となっていることが現在の業界に閉塞感をつくり、医師たちにはないマネジメントへ気持ちが傾く現象が起きています。方向性として悪いことではないのですが、ほぼ全ての方がその流れになるのがこの業界の特殊な部分であり、薬剤師全体の質的な低下の誘因の一つになっています。今後しっかりとした活躍の土壌や、人的資源を構築していくために、現場でできることをもっと模索し、臨床での取り組みを具現化し広げていくことが必要と強く感じています。ほかにも個人的に、国母店でも無菌室を作っていたため、点滴等を含め扱える薬剤を増やしていけたら、さらに充実した取り組みになり嬉しいです」としている。